

留学先国名 : オーストラリア

留学先学校名 : インパクト・イングリッシュ大学

留学期間 : 平成 27 年 9 月 24 日 ~ 平成 27 年 12 月 18 日

私はオーストラリア、メルボルンで三か月間語学学校に通いました。ちなみにメルボルンを選んだ理由は、小さいころからテニスをしていて全豪オープンを実際に見てみたかったというのと、メルボルンが何度も世界で一番住みやすい都市ランキングで上位にランクインしていて興味がわいたこと、またコーヒーにこだわりを持った都市でたくさんのカフェが立ち並んでおり、そんな都市でコーヒーについて学びたいと思ったからです。

最初の7週間は一般英語コースでスピーキング、リスニング、ライティング、リーディングをバランス良く行うコースを受講しました。登校日初日にクラスの振り分けテストを受けて intermediate のクラスからスタートしました。そのクラスでは文法やリーディングに関してはすごく簡単で正直つまらなく感じるほどでしたが、スピーキングやリーディングになると途端に発言できなかつたり、正確に聴き取れなかつたりと自分の英語の出来なさを痛感させられました。毎日、8:50から13:15まで日本語を口に出せない環境で過ごして、徐々に発言もできるようになり、5週目からは一つ上の upper-intermediate のクラスに上がることができました。やはり一つ上のレベルになると周りのレベルや教科書のレベルも上がりついていくのが大変ではありましたが、一つ上に上がったことでの喜びと何としてでも英語を話せるようになりたいとの思いで取り組みました。

8週目からの5週間はバリスタ英語コースというコーヒーについて学ぶコースを受講しました。このコースでは、コーヒーの淹れ方はもちろんコーヒー豆の栽培方法、ローストの仕方、豆による味の違い、ラテアートのやり方さらにはカフェで働く際に知っておかなければならない様々な知識、例えば面接の仕方や接客の仕方、オーストラリアでは多くのカフェがバーを併設しているので、ワインやチーズについても深く学びました。授業中にみんなで実際に現地のカフェに足を運び、バリスタの方からお話を聞いたりする中でリスニング能力やスピーキング能力が鍛えられました。また、学校に併設されているカフェで職業体験をしたり、サルベージンアーミーの一環で運営されているカフェでホームレスの方たちにコーヒーを提供したりもしました。

この学校自体は日本人の割合は多かったのですが、母国語禁止のポリシーが厳しく、英語オンリーの環境でした。そのため、日本人の友達の日本語を聞いたことがなかつたり、学校が終わった後も英語で話したりと客観的に見ると少し変わった状況ではありましたが、結果的にはこのことが、自分の英語力を上げてくれた最大の理由だったと思います。

オーストラリアに来ると日本との違いがたくさん発見できます。最初に驚いたのは、駅や学校でのトイレです。日本では小便の際、一つ一つブースがあって区切られていますが、オーストラリアでは区切りがなく一枚の鉄の板があるだけです。個人的な意見では、オーストラリア式の方が何人もいっぺんにできるので効率的だし、掃除も簡単にできるのでいいように思います。これだけを見るとくだらない話のように聞こえるかもしれませんが、このことから日本はプライバシーを守ることを重視し、オーストラリアは効率や利便性を重視して

いるようにも思えます。またファストフード店やフードマーケットに行けばわかるのですが、基本的に外国人は後片付けをせずに立ち去ります。日本では返却口などに返しに行ったりすると思うのですが、ほとんどの人がそれをしませんし返却口すらないことがほとんどです。日本的感覚からすれば不思議に思うかもしれませんが、このことが逆に清掃の仕事やそれに伴う雇用を生み出していたりと、一概に悪いことではないような気がします。

日本とは考え方が全く違うと思ったことがもう一つあります。最初の一か月はホームステイをしていたのですが、その家では電気をほとんどつけません。電気をつけたまま寝ていて何度も怒られたのですが、目が悪い私としてはテレビを見るときはせめて明かりをつけたかったのですが、このことをホストマザーに言うと「じゃあ、日本人は映画を明るいところで見るのか？」と言われました。日本のテレビ番組、特に子供向けのアニメなどでは明るい部屋で見るようにとの注意書きがあったりしますが、オーストラリア人にそのような概念はないようです。

外国に住んでみるとこのような考え方の違いであったり、当たり前だと思っていたことが当たり前でなかったりと、日々自分の価値観や考えを揺さぶり、壊されます。日本的な価値観は日本人としてとても大切であり、失くしてはいけないと思う一方、新たな価値観に出会い、既存の価値観を壊されることで、自分自身が成長できるのだと思います。また、そこから自分というものを見つめ直すと同時に、日本と他国との違いを感じ、日本について深く考えさせられます。このような経験を通して「グローバルな人間」へと成長できるのだと思います。

最後に、大阪グローバル奨学金が私のオーストラリアへの語学留学を後押ししてくださいました。このような機会を20歳という多感な時期に与えて下さったことに感謝しております。本当にありがとうございました。そして今後も大阪府の若者を「グローバルな人間」へと後押しするこのようなプログラムが続き、大阪府がグローバルな都市として輝くことを切望しています。